

二〇一五年度春季企画展

「学徒たちの戦場——戦後七〇年」

檜皮瑞樹

二〇一五年度春季企画展では、「戦後七十年 学徒たちの戦場」をテーマとし、狭義の出陣学徒にとらわれず、繰り上げ卒業や既卒の「学徒兵」、あるいは復員兵や家族など学徒の関係者にまで視野を広げた展示を行なった。二〇一四年度秋季企画展「十五年戦争と早稲田」に引き続き、戦争と大学をあらためて問う企画となった。

今年度は敗戦七〇年の節目の年であり、多くの大学で戦争をテーマにした企画展示が開催された。また、安全保障法案の具体化（企画展開催時、のちに国会で強行採決）、戦争をめぐるリアリティの欠如への危機意識などもあり、本企画展には予想以上に多くの方のご来場を得ることができ、また数々のメディアで取り上げられた。期間全体の入場者数は三、五六五名であり、「早稲田大学で『戦後七十年 学徒たちの戦場』開催中です」『報知新聞 ブログ報知』（二〇一五年四月一六日）「東京の信濃」など、webサイトを含む多くの媒体で紹介された。

以下、展示資料の一部や展示のコンセプト等について叙述することで、企画展の簡単な紹介にかえたい。

二〇一五年度春季企画展

戦後七〇年
学徒たちの戦場

2015
3/25^水
— **4/25**^土


入場無料 2015年度春季企画展「学徒たちの戦場」
戦後七〇年

【時間】 **10:00-17:00** 入館は30分前まで

【休館】 日曜日

【会場】 早稲田大学 早稲田キャンパス2号館
会津八一記念博物館1階 企画展示室

【主催】 早稲田大学大学史資料センター
☎ 042-451-1343 ☎ <http://www.waseda.jp/archives/>



プロローグ

一九四五年八月一日の敗戦から七〇年が経過した今、戦後日本社会が共有していた戦争やそれにまつるう記憶、あるいは学徒出陣や学徒兵に関するイメージの多くが、急速に薄らいでいる。

それでも、一九四三年に在学生の徴兵猶予が廃止されたことや、同年一〇月の出陣学徒壮行会の風景、学徒兵の特別攻撃隊—いわゆる特攻—による戦死などは、現在でも書物や映像などによって語り継がれ、多くの人々に強く記憶されている。このような学徒出陣や学徒兵に関する「語り」は、「在学生の悲劇の戦死」というイメージに収斂するという特徴を持っているといえるであろう。

しかし、周知のように、戦争に駆り出された「学徒」が狭義の出陣学徒にとどまらないことはいうまでもない。一九四一年一〇月には、修業年限が三ヶ月短縮され、学生の多くが学業半ばで戦地へ送り込まれた。この繰り上げ卒業は、一九四二年からさらに三ヶ月短縮（修業年限は二年六ヶ月）され、一九四四年まで継続した。戦況の悪化やそれによる経済的事情により高等学院から大学への進学を断念した学生も少なくなかった。

また、既卒者の多くも徴兵の対象となり、戦地へ出征した。彼らのなかには家庭を持つものも多く、出陣学徒とは異なる戦争による「犠牲者」となった。同時に、戦死した「学徒」の遺族や友人たちは、彼らの死と向き合い、戦後社会を生きていくこととなった。

さらに、戦地から生きて生還した学徒兵たちについては、その経験や、彼らの存在すら語られることが少なかった。「幸運」にも戦地から復員を果たした学徒兵も、戦争の記憶と、戦死した「仲間」に対する贖罪の意識を持ち続けな

がら、戦後社会を生き抜かねばならなかった。

戦争と学徒兵、あるいは戦争と大学との関わりを問い直す際には、出陣学徒 という狭いフレームワークに固執するのではなく、繰り上げ卒業生組や既卒 学徒兵、あるいは復員学徒や遺族たちが 生きた 戦後、という問題にまで視野を拡げることが求められている。

戦争や学徒たちの戦死を、悲劇や英雄譚として語り継ぐのではなく、自らの死と向き合うことを余儀なくされた学徒兵の姿を直視し、また、彼らや家族・仲間をそのような境遇に追い込んだ戦争というものの本質をあらためて問わなければならないといえよう。

I 日常 から戦場へ

一九四一年一月八日、日本はアメリカ・イギリス等に宣戦布告し、ついに泥沼の戦争へと突入していった。戦局の悪化と戦力不足を見越して、同年一〇月に学生の修業期間が三ヶ月短縮され、在学生にとっても戦争は避けられないものであることが明確となった。翌一九四二年以降は、最高学年の授業期間が六ヶ月に短縮され、学業の半ばで多くの学生が戦地へと送り込まれた。

さらに、学生に与えられていた徴兵猶予の特典も一九四三年一〇月には廃止され、徴兵年齢に達した学生は在学資格のまま出征・入営することとなった。入営中の学徒兵の身分は、基本的に休学扱いとされた。翌年九月の卒業予定者には仮卒業證書が発行され、戦地で卒業を迎えることとなった。しかし、戦死後に卒業扱いとなり、遺族に卒業証書が届けられる場合もあった。

一九四四年からは徴兵年齢が一九歳に引き下げられ、まさしく学生に対する「根こそぎ」の動員が行われた。

一方、学生たちは徴兵と出征を、自らの「使命」として―もちろんどこまで本意かを問うことは出来ないが―受け入れていた。出征と「死」がほぼ同一であると認識されたからこそ、出征までの学生生活は彼らにとって貴重な時間となった。

また、彼らを送り出す側の様相も決して一様ではなかった。公式な場では、国家への忠誠と勇ましい死を称賛するような言葉が繰り返されたが、その一方で、私的な空間、あるいは教室という決して自由が保障されていたとはいえない教室という場においても、彼らの「生きた生還」を望む声は確かに存在した。

このような声は、同時代においても、あるいは戦後社会においても、戦時体制と国家主義という声高な暴力によって押し潰され、また戦死を美名として賞賛するような言葉によって打ち消されてきた。しかし、学徒の死を望まなかった家族や仲間たちの人間としての素直な声に、私たちは耳を傾けなければならぬであろう。

木村時夫の回顧

木村時夫は一九二〇年生れ、早稲田大学在学中の一九四三年一〇月に学徒出陣を経験、中国大陸を転戦し、一九四五年一二月に復員。戦後は、早稲田大学社会科学部教授、同社会科学研究所々長などをつとめた。二〇〇九年死去。

木村は一九四三年の大学主催の学徒出陣壮行会前に行われた史学科による壮行会のことを以下のように書き残している。教員煙山専太郎が学生たちに投げかけた言葉は、当時の社会状況を考えれば異質な、そして相当の覚悟を要するものであった。

飲むものも食べるものもない、ただ言葉と言葉だけの会であった。今は亡き煙山専太郎先生が、教員を代表して我々に贈られた言葉は、大要つぎのようなものであった。

「軍隊という所は野蛮な所である。諸君の教養がこれをいくらかでもよくすることが出来ればと期待する。諸君決して死んではならない、血気にはやったり、変な責任感にとらわれて死を急いではならない。是非元気で帰ってきてほしい。古来、中国では人を送るに酒をもつて送るというが、今はそれが無い。詞をもつて送るを、次によいとすが私にはそれも作れない。ただ、言葉をもつて送るだけで、諸君には誠に相済まない」

しかし、私には先生の言葉が一番嬉しかった。時局便乗というのか、当時の中年以上の者がやたらに我々青年に安易な死を求める風潮があったからである。

木村時夫「早稲田大学百年の回顧」より

『紺碧の空なほ青く』早稲田学生新聞会編、一九七七年に所収

〔主な展示資料〕

○徴集延期証書（高木多嘉雄）／東京聯隊区徴兵署、一九四二年七月二一日（新谷照氏寄贈高木多嘉雄資料20―8）

高木多嘉雄は一九二二年東京出身、一九四三年一〇月早稲田大学政治経済学部在学中に学徒出陣、一九四五年三月フィリピン・ルソン島で戦死。

○田中穂積宛書簡／小泉信三、一九四三年一月二五日（大島正二関係資料70）

○田村専之助宛葉書／津田左右吉、一九四二年二月二八日（田村八束穂氏寄贈資料D 013）



写真 1

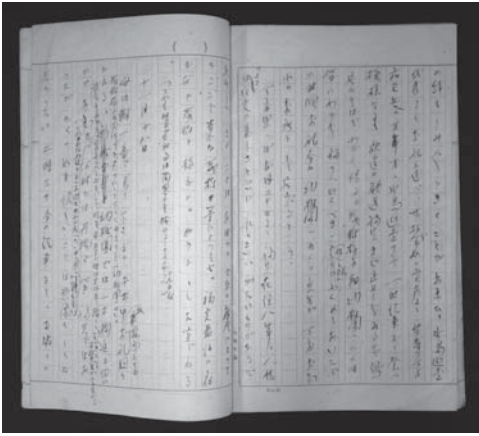


写真 2

相良克明に召集が来たことをしらせる津田左右吉の書簡。相良は福島県出身、一九二九年三月早稲田大学文学部卒業、卒業後は文学部講師をつとめる。一九四二年三月召集、一九四三年一月フイリピンで戦死。

○扇子（市島保男出陣に際しての寄書き、於浅草騎西屋）／一九四三年一月一日（馬越千鶴氏寄贈市島保男資料1-1）〔写真1〕

扇面に書かれた寄書き。学徒出陣に際して送られたもの。勇ましい戦死を謳ったものばかりでなく、祈 武運長久 しつかりやろうぜ、という洒脱なものから、生きて生きて 生き抜きて 死せんことを 願ふのみ、といった率直な内容の記述まで多彩である。

○扇子（忠魂、志賀利吉宛）／早稲田大学教授江家義男、一九四三年一月（志賀利吉氏寄贈資料1）

志賀利吉氏は一九四三年四月早稲田大学専門部法律科入学、同年一月学徒出陣となり徴兵検査を受けるも不合格。学苑に復学し勤労働員に参加、一九四五年第三期特別幹部候補生に志



写真3

願、八月一五日を豊橋陸軍予備士官学校でむかえた。

○出征の記（東部第四十八部隊）／福富謙二、一九四三年一月二一日午前九時（福富茂樹氏寄贈資料61）〔写真2〕

福富謙二は一九一〇年生れ、一九三三年早稲田大学商学部卒業。卒業後は金沢貯蓄銀行に勤務、結婚し子供三人を授かるも、一九四三年一月に臨時召集となった。満州地域から宮古島を転戦、一九四五年四月沖縄野戦病院で死去。

入営と訓練の日々

徴兵対象となった学徒たちは、まず主に出身地で徴兵検査を受けることとなった。検査の結果によって配属される部隊が決定され、本格的な軍隊生活が始まった。彼らの軍隊での生活は、まさしくカルチャーショックの連続であった。大学という「自由」と「権利」とが保障された空間で生きた学徒たちにとつての軍隊生活とは不条理と不自由の空間であり、暴力によって絶対服従を強いられる場であった。

周知のように、陰險なイジメ、露骨な暴力が学徒兵を苦しめた。その一方で、配属部隊、特に陸軍と海軍ではその軍隊経験も大きく異なった。海軍特別飛行隊のように、高度な技術取得を求められた部隊の場合は、その生活も長期にわたった。そのため、出征までの期間に、家族との往復書簡や手記など、多くの関係資料を遺すことが可能となった。

〔主な展示資料〕

○忘備帳／高橋久雄、一九四三年一〇月～一九四四年二月（田田万紀氏寄贈資料1）

高橋久雄は、一九四三年九月早稲田大学専門部政治経済科繰上げ卒業、同年一〇月召集、一九四四年九月東港で戦死。資料は、三重海軍航空隊・海軍予備生第四分隊第一班時代の手帳。

○手帳（武山海兵団入団前後の日記を含む）／市島保男、一九四三年一二月から（馬越千鶴氏寄贈市島保男資料1―11）

○アルバム（第一四期海軍飛行専修予備学生）／堀家醇、一九四四年頃（堀家春樹氏寄贈資料2）〔写真3〕

II 戦場の学徒たち

内地部隊で訓練を終えた学徒は、ただちに実際の戦争に投入された。敗戦間際になると、連隊での訓練もままならないまま、戦地へと送られるケースも少なくなかった。

学徒たちの戦場は多岐にわたった。中国大陸から東南アジア、フィリピンからニューギニア方面へと広がり、いくつかの戦地を転々とした学徒も多く、戦地での生活は数年にわたった。

戦地での学徒たちの生活、あるいは彼らの「姿」を写し出すような資料は限りなく少ないといえよう。激戦地であればあるほど、あるいは部隊が壊滅しジャングルでの逃避生活を余儀なくされた学徒たちに、自らの思いや存在を証明する余裕など存在しなかった。苛烈な戦場に身を置いた学徒たちのなかには、家族への連絡や、遺書を書く機会すら与えられなかった。このことに、私たちは想像を馳せなければならない。

そのような戦場における学徒たちの「姿」を知る上で、内地の家族や友人との往復書簡は貴重な資料となる。書簡

の内容は、家族への感謝や内地での空襲被害を心配する声、あるいは自らの死後に遺される家族への憂慮など、多岐にわたっている。検閲という制約があったにもかかわらず、また戦争や国家を賛美する美辞麗句の裏側に、学徒たちの率直な心境を読み取ることができる。

戦地からの手紙

松井栄造書簡（一九四三年頃）

支那の生活も大分馴れて来ました、支那語も次第に覚えて来ました、不自由なことはありません

唯本の無いこと丈が不自由です、何か送って下さい、

中央公論か改造か、文芸春秋か、何か毎月送って

頂けると都合が良いですが、一冊でも良いのです、きまったものがよいです、短歌研究でもいいです。それとマイナーハーモニカを送って下さい、ナチュラルマイナーと二本頼みます。子供だまし

の様な慰問袋はありません、紀坊の所属部隊を

知らせて下さい、東京の石井さん、岐阜遠藤さんへは

時々手紙を差上げて下さい、内木さんへも頼みます

福富謙二書簡（一九四五年四月頃）

御病状如何ですか。何時々々迄も長生きして下さい。

何にも御孝養をつくしまゐらすこともなくそして今又御年老

にお歎きをおかけ申すことを何卒お許し下さい。

併し何にしても歌はよろこびでした歌を信仰の如き迄徹し得た

自分にとって死に直面しつつある現在に於て万ての夢は消

え去つて心あく迄淡々としてゐます。（こゝでの歌は殆んど未発表になりませう）

第一戦に於て皇国の兵として充分つくし得ざりしこと、

後に残る一家のことが氣にかゝりますが、

子供達にも妻にも何にもしてやれなかつた様に思ふ。

敏代が一番可哀想に思はれてなりません。

苦難の人の世を子供三人を力に乗り切つてゆかれる様

力づけてやつて下さい。

〔主な展示資料〕

○金野衣子宛書簡／金野廉司、一九四四年カ五月三日（岸恭子氏寄贈資料一）

二枚の便箋の表裏にびっしり書かれた妹宛の書簡、教育隊生活や遺された兄弟の身の処し方などについて記されている。

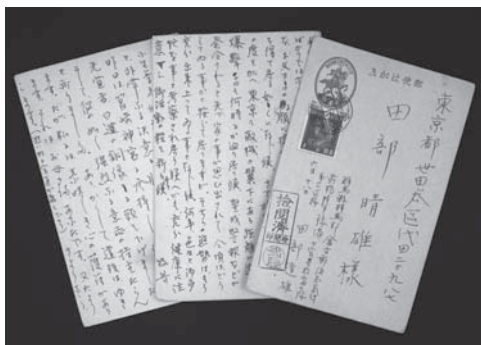


写真 4

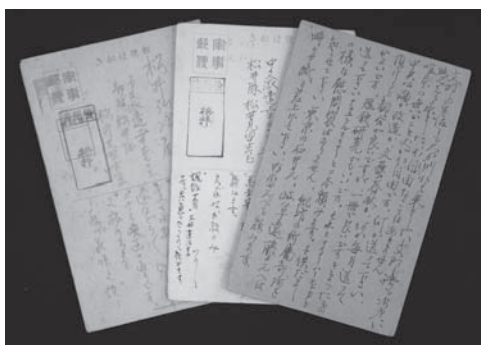


写真 5

○椎根幸雄宛葉書／椎根正、一九四五年一月三日（椎根幸雄氏所蔵）

椎根正は一九二二年生れ、一九四三年九月早稲田大学高等師範部を繰上げ卒業。入営後は、海軍第十三期飛行予備学生として土浦や福山で訓練を受けた。一九四五年六月沖繩周辺で戦死。

○家族宛葉書三通／田部達雄、一九四四年六月～九月（新井けい子氏寄贈資料

31・33・49）〔写真4〕

田部達雄は一九二三年東京出身、一九四三年一月早稲田大学政治経済学部進学と同時に学徒出陣となった。入営後は、前橋予備士官学校に入校、一九四五年三月フィリピン・ルソン島で戦死。

○中村万作宛書簡／市島保男、一九四五年四月頃（馬越千鶴氏寄贈市島保男資料1—20—1）

特攻出陣を直前にして、中村牧師に対してこれまでの厚情を謝すとともに決意を述べた書簡。市島保男は一九四三年一月早稲田大学商学部在学中に学徒出陣、一九四五年四月神風特別攻撃隊員として沖繩東南海上で戦死。

○松井弘次宛葉書三通／松井栄造、一九四三年頃（清水昇氏寄贈松井栄造関係資料27）〔写真5〕

松井栄造は一九一八年静岡県浜松市出身、一九三七年四月早稲田大学第一高等学院入学。野球部で活躍し、一九

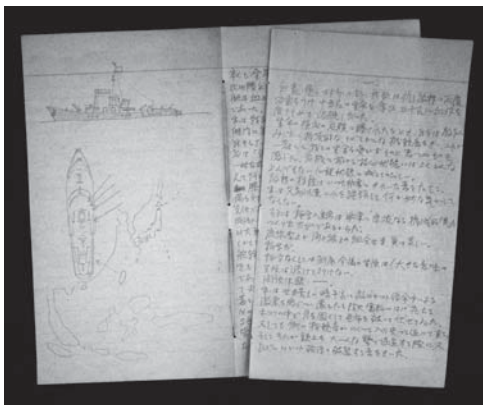


写真 6

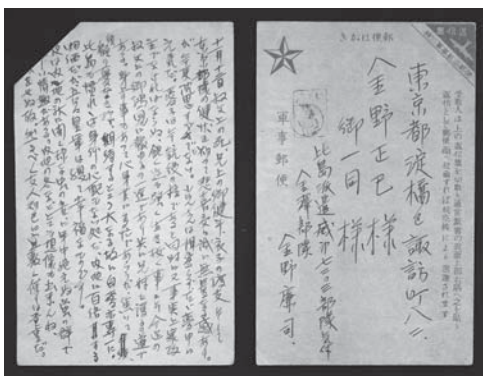


写真 7

四一年二月早稲田大学商学部を繰上げ卒業。一九四二年二月召集、同年5月豊橋陸軍予備士官学校入学。見習士官として中国大陸に渡り、一九四三年五月湖北省姚家坊付近で戦死。

○家族宛葉書四通／福富謙二、一九四四年春～一九四五年四月頃（福富茂樹氏寄贈資料2・10・17）

○柴崎千枝子宛葉書三通／柴崎信緒、一九四五年（柴崎信緒氏寄贈資料3）

乗艦にしたためた短歌を、添削を請うため書き送ったもの。柴崎信緒氏は一九二三年生れ、一九四三年九月早稲田大学専門部法科を繰上げ卒業。同年一〇月召集、主に通信士として護衛艦に勤務し、佐世保鎮守府で一九四五年八月一日をむかえた。

○手記／柴崎信緒、一九四五年

八月八日（柴崎信緒氏寄贈資料

2）「写真6」

一九四五年八月八日の午前、対馬東方海上を護衛航海中にB 29及びP 38編隊に急襲を受け、多数の死傷者を出しながら、対馬比田勝港へ入港後に書かれた手記。

○家族宛葉書一通／金野廉司、

一九四四年秋頃（岸恭子氏寄

贈資料 2・3 「写真7」

金野廉司は一九二〇年生れ、一九四〇年に専門部商科入学、一九四二年九月繰上げ卒業。パイロット萬年筆株式会社へ入社直後に召集、一九四五年一月フィリピン・ルソン島で戦死。

III 戦場から 日常へ

戦地における学徒の「死」は、さまざまなかたちで家族や友人たちにもたらされた。「死」をめぐる詳細な状況や、遺書を含む多くの遺品が、配属部隊の関係者によつて家族のもとに届けられるケースも確かに存在した。しかし、その一方で戦死した場所さえ不確かなケースも存在したことを忘れてはならない。

また、学徒たちの「死」を受け止める家族の様相も多様であった。「仇をとる」「云々といった勇ましいものもあったが、彼らの「死」に直面した悲しみを率直に表現したケースも存在する。彼らの「死」が戦意高揚に利用されることへの忌避感が存在したことも忘れてはならない。

一方で、辛くも命を落とすことなく敗戦を迎えた学徒たちの「帰還」は、相当な困難を伴うものであった。着の身着のままの復員生活は、彼らが「敗残の兵」であったことを象徴した。また、「帰還」した彼らが目にしたのは焦土と化し、荒廃した「祖国」であった。復員後、学苑に復学し学業を再開した者もあったが、経済的な理由等によつて学業の継続を断念しなければならなかったものも少なくなかった。

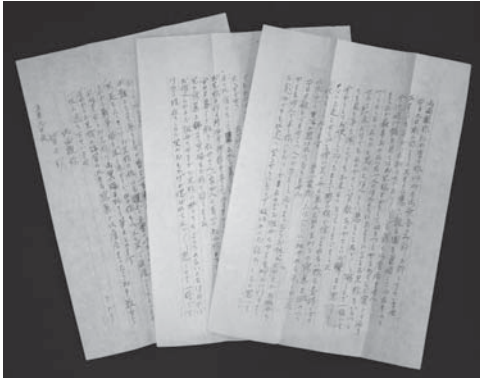


写真 8

〔主な展示資料〕

- 松井半次郎書簡／松井勲、一九四三年六月一日（清水昇氏寄贈松井栄造関係資料28）
- 松井栄造の戦死と、その死の詳細な状況を知らせる九枚にもわたる書簡。松井勲は栄造が所属した部隊の隊長。
- 姚家坊附近夜襲 松井見習士官戦闘経過要図／一九四三年（清水昇氏寄贈松井栄造関係資料33）
- 布告（神風特別攻撃隊琴平水偵隊員の死去について）／聯合艦隊司令官長 小澤治二「三カ」郎、一九四五年八月一日（椎根幸雄氏所蔵）

神風特別攻撃隊琴平水偵隊として、一九四五年六月二五日から二八日の四日間に戦死した九名の戦死とその状況に関する布告。九名の最初に早稲田大学高等師範部卒業生である椎根正の名前がある。

- 両親宛書簡／馬越ミドリ、一九四五年五月九日（馬越千鶴氏寄贈市島保男資料4-5-65）〔写真8〕

馬越ミドリは市島保男の妹。兄保男戦死の報に接し、両親宛てにその突然の悲しみと、亡き兄への想いを率直に綴った手紙。

- 市島文字宛書簡／市瀬宗夫、一九四五年八月一日（馬越千鶴氏寄贈市島保男資料5-2-44）

市島保男の友人であり早稲田の同窓でもあった市瀬宗夫より遺族に送られた書簡。市島の遺書がラジオ放送で紹介されたことを伝えるもの。

戦後を生きる

復員した学徒兵や戦死した学徒兵の遺族にとつての戦後は、戦死した学徒兵の「死」と向き合うことから始まった。生還した元学徒兵のたちのなかには、自らが「死に切れなかった」ことを悔い、また戦死した学友への謝罪の意識を抱えた者も少なくない。自らの生存を悔やみ、それゆえに戦場での経験を語ることを憚った。本来であれば喜ぶべき自らの帰還が、生き延びた者にとつての重荷となることもあった。戦死した学徒たちが叶えることの出来なかった「生」とともに生きることが、遺された元学徒兵にとつての生存証明でもあった。

一方、戦死した学徒の家族にとつて、彼らの「死」を受け入れるためには多くの時間を必要とした。戦死した場所やその原因すら明らかにされなかった遺族にとつて、学徒の「生きた証」を明らかにすることが、彼らの死を受け入れるためには不可欠だったといえよう。同じ部隊に所属した人を捜し、死因や戦没地についての訂正を求める活動も存在した。

復員学徒の回想

柴崎信緒氏（2013年及び2014年実施の聞き取りより）

（生還者にとつての「苦しみ」や「痛み」について問われ）

戦争と敗戦による敗北感は20代前半の人間の精神性をひどく傷つけ、その傷は自分でも癒すこともできないまま、消えないフィルムとなつて心の奥底に残ってしまった。

自己を取り戻した時間に、ふと頭を持ち上げるのは「傷」の痛みであり、しばしば繰り返し登場する軍隊の経験である。夢にうなされて汗でびっしょりになって飛び起きたのは、復員直後から何年間かの間であったが、

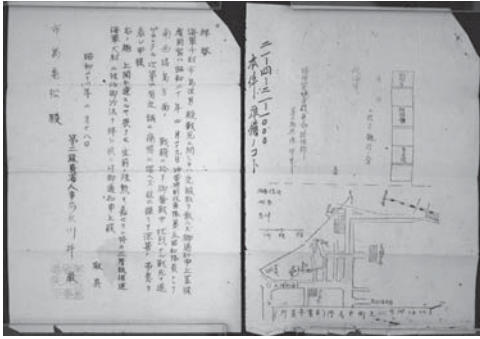


写真 9

いまでも当時のありありとした断片が、時々脈絡なしにふと夢間に現れることがある。

〔主な展示資料〕

○軍隊手帳／福富謙二（福富茂樹氏寄贈資料63）

福富謙二の軍隊での履歴が記載された軍隊手帳であり遺品の一つでもある。

○通知（市島亀松宛）／第二復員省人事局長川井巖、一九四六年二月一八日（馬越千鶴氏寄贈市島保男資料1—21—1）〔写真9〕

市島保男の戦死に関する情報、及び二階級昇進（海軍大尉）を知らせる通知。横須賀英霊安置所の案内を含む。

○椎根正吉宛書簡／越後郷子（復員業務課）、五月二二日（椎根幸雄氏所蔵）

椎根正の戦死状況について、より詳細な情報を問い合わせたことへの返書。椎根正と同じ部隊に所属した生存者の住所なども記されており、遺された家族の懸命な活動の一端をうかがうことができる。

○手記「妄念」／大西鐵之祐、一九四八年（大西アヤ氏所蔵）

大西鐵之祐は一九一六年奈良県出身、一九三九年早稲田大学商学部を卒業、学生時代にはラグビー部で活躍した。一九四〇年一月召集、近衛歩兵第四連隊に配属、フランス領インドシナに出征した。敗戦をスマトラでむかえた大西は、マラッカでの収容所生活を経て、一九四六年六月に復員し

た。戦後は、早稲田大学教授のほか、早稲田大学ラグビー部監督・ラグビー日本代表監督としても活躍した。

○高木磯吉宛葉書／早稲田大学校友会、一九五四年一〇月一日（新谷照氏寄贈高木多嘉雄資料20―6）

早稲田大学校友会からの、高木多嘉雄の移転先を問い合わせる内容の葉書。敗戦から一〇年近くが経過しても、大学が学徒出陣や戦争犠牲者の情報収集に苦慮している様子がうかがえる。

大西鐵之祐「人生の再出発」（手記「妄念」の冒頭）

敗戦と共に、三十年培はれし思想と主義は歴史上になき、この事実の前に動揺した。過去二年間は自己の思想と主義に対する反省と再認識に終始された。然し自分の進んで来た道は決して間違つてゐなかつた事を自覚すると共に、この基盤の上に立つて、これから再出発すべき時代に到達した。昭和二十三年こそ、この年である。

（中略）

私は今日決心したこの方向に、大戦によって亡くなった幾多戦友に代わって、祖国復興に第一歩を進める。明るい祖国の再建に。

